

安心できるかわりを



「先生は、ぼくばかり叱る！」

4月、3年生の子どもたちとの新しい出会いを経て、いいスタートがきれたと思った頃、ある子どもが気になってきました。A君です。

A君は休み時間のたびに、友達とトラブルを起こします。一緒に遊んでいた友達でも、気に入らないことがあるとすぐに叩いてしまうのです。自分に非がある場合でも、少しでも気に入らない態度をされると腹を立ててしまいます。休み時間のたびに子どもたちからの苦情が繰り返され、そのたびにA君を叱ったところ、A君は目をつりあげ、そっぽを向いてふてくされた態度をとりました。その態度にまたつい叱りそうになった矢先、涙をためた目でA君が一言つぶやきました。

「先生は、ぼくばかり叱る！」
…胸に突きささる一言でした。

「毅然と」は大事、でも本当に大事なのは…

初めての学級担任。しかも学級経営がうまくいかずに辞めてしまった同僚の話聞いて、肩に力が入っていました。若いからといってなめられるようでは困ると、トラブルが起こるたびに内心ドキドキしながら、「毅然と」と自分に言い聞かせていました。

その結果、大事なことを見過ごしていたようです。それは「子どもの心と向き合う」ことです。

効果的な仲裁法は

トラブルが繰り返されると「A君が悪い」「なんでこんなことをするの?」と、ついA君を叱ってしまいそうになります。繰り返されるトラブルに、「きつと今回の件もA君が原因だ」と決めつけてしまうと、A君はますます「ぼくだけが叱られた」という点に固執してしまい、ますます言うことを聞かなくなるでしょう。ひどい悪循環に陥ります。

友達同士のトラブルが起きたとき、今ではこのような仲裁の方法をとっています。

- ① ふたりを呼び、何があったのかをひとりで説明させる。ひとりが話しているときは、絶対に相手には口をはさませない。
- ② 自分の行動で悪かった点を挙げさせる。10点満点で点数をつけるやり方も有効。全部悪ければ0点、半分悪ければ5点など。(10点をつける子どもはほとんどいない)
- ③ お互いに悪かったことだけを謝らせる。
- ④ 最後に教師のフォローの一言。(小言にならないように)

大切なのは自分で考え、自分で反省させることです。そうすれば子どもは納得します。A君もこのような方法をとり始めてから、素直に状況を説明してくれるようになりました。

それいけ!

新米先生

愛情たっぷり、安心のキーワード

教育相談を受けた際、A君は学校でも家庭でも常に緊張し、非常に不安感の強い子であることがわかりました。まわりと協調できずトラブルを起こす子は、この傾向が強いです。

まずはたっぷり愛情を注いであげることが必要になります。以下に、私が学んだ子どもを安心させる5つのキーワードをあげます。



(1) 見つめる…教師は話をしている子どもの目を優しく見つめてあげます。怖い顔をして話を聞いても、子どもは萎縮して話さなくなります。叱るためではなく、解決するために話を聞くのです。

(2) ほめる…見つめながら、時折にこおりとほえんであげます。すると子どもはさらに安心します。

(3) 話しかける…優しく話しかけます。強い口調で話しかけては子どもが緊張してしまいます。いつもより大げさに優しく話しかけましょう。

(4) ふれる…ケンカをした後のA君はいつも目をつりあげ、私とも目を合わせようとせず、黙って横を向いたままじっと立っています。そんなときは、背中をゆっくりさすってやり、呪文のように繰り返します。「大丈夫だよ」「ちゃんと話してごらん」こうするとつりあがった目は次第に穏やかさを取り戻し、ポツリポツリと話し始めます。背中をさすってやることで、安心感を得ることができるようです。

(5) ほめる…とにかくたくさんほめることです。叱るくらいならとことんほめましょう。ケンカの仲裁の際にも、相手の話をだまっていって聞くことができたこと、自分の悪かった点を見つけて反省できたこと、素直に謝れたこと、そして、相手を許すことができたことなど、ほめるチャンスはたくさんあります。叱られればイヤな気持ちになりますが、ほめられてイヤな気持ちになる子どもはいません。

やっぱり授業が一番

日常のかかわりと同じように大切なものが授業です。満たされないものをかかえたA君

でしたが、気分がのついているときのつぶやきにはきらりと光るものがありました。そこを逃さず大いにほめ、活躍の場を与えることで、子どもたちも次第にA君を認め、受け入れるようになってきました。またA君も自信をつけ、自分の居場所をクラスの中につくっていくことができました。

子どもは正直で「わかる」「できる」「楽しい」と授業で満足した後は、とてもいい表情をしています。逆も然りです。教材研究をしっかりおこない、時間をかけた分だけ、子どもとの強い絆ができると思います。

思いは伝わっています

A君とは、持ち上がりで2年間かかわることになりました。一進一退で何度も何度も同じことを繰り返しました。

クラス替えて離れる最後の終業式に、A君からぶつきらぼうに渡された手紙には、「叱ってくれてうれしかった。友達と仲良くできるようになったよ」と書かれていました。胸にこみあげてくるものがありました。

手のかかる児童ほど、ふと見せる成長に感動させられることがあります。それは明日のことかもしれないし、ずっと先のこともかもしれません。新米先生も、これから先、忘れられない子どもたちとの出会いがあるはず。新しい1年を、子どもたちと一緒に笑って泣いて、時には怒って頑張っていきましょう。